カートリッジ比較

Thorens TD240-2 & カートリッジ

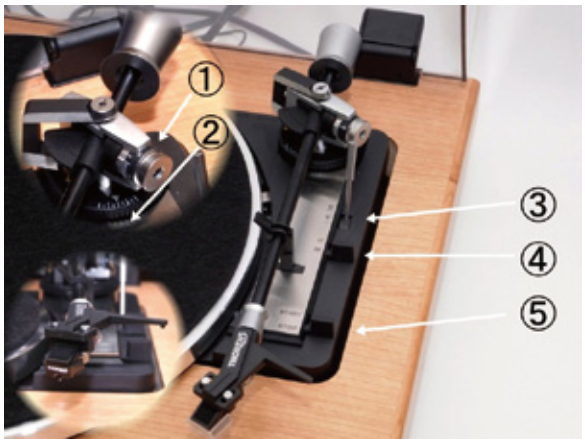
TD240-2

希望小売価格￥127,000

形式：フルオート・ベルトドライブ●アーム：Thorens TP-19-1●ターンテーブル：アルミ製 0.7Kg●モーター：電子制御 DC モーター●対応速度:33-1/3、45、78 回転●サイズ：W400×H360×D125mm●重　量：8.5Kg(1 台)

TD240-2 のボディーには天然木が使われています。クラシカルな外観と相まって、いかにもレコードプレーヤーらしい雰囲気を持っています。ターンテーブルを外すと、ベルトドライブ・フローティング機構が分かります（赤いプラスティックは、移動用のフローティング固定パーツ）。レコードを乗せれば、後はレバーを押すだけで演奏が始まり、終わるとターンテーブルが自動的に停止する「セミオート方式」が採用されています。

①針圧調整ダイヤル
②インサイドフォースキャンセラー調整ダイヤル
③アームリフター
④レコードサイズ切り替え レバー
⑤スタート / ストップ レバー



試聴したカートリッジ

audio-technica AT-95E

（Thorens TD240-2 付属品）

■発電形式 MM（ムービングマグネット）■周波数特性 20Hz ～ 20kHz■負荷インピーダンス 47kΩ■出力電圧 3.5mV±1dB1kHz@5cm/sec■針先形式 楕円針■針 圧 1.5 ～ 2.5g（2.0g）■重 量 6.6g■価 格：海外モデル / 実売 5000 円程度

Goldring 1012GX

■発電形式 MM（ムービングマグネット）■周波数特性 20Hz ～ 20kHz±2dB■負荷インピーダンス 47kΩ■出力電圧 6.5mV±1dB1kHz@5cm/sec■針先形式 ラインコンタクト針：6 ×100μm■針圧 1.5 ～ 2.5g（1.75g）■重量 6.3g■価格：42,000 円

Vienna Acoustics THE MUSIC

QUAD QC24P

AIRBOW PM11S3 Ultimate

TD240-2　付属カートリッジ（AT-95E）

さすがにこの価格帯のカートリッジでは、音の細やかさは CD に敵いません。高域の伸びも、低域の量感も、最新のデジタル機器には及びません。しかし、すべての音がシームレスに繋がっているようなこの何とも言えない「滑らかさ」、ボーカルが中央に高密度に定位する独特の「中央定位の良さ」、さらに中央のボーカルを取り巻くように前後左右に大きく広がる響きの良さ、それらを体験してしまうと、デジタルの殺伐とした雰囲気に戻れなくなり、アナログレコードに戻るマニアの気持ちがよく分かります。

解像度感という意味では劣りますが、硬くて平坦な出来の悪いデジタルサウンドとは次元の異なる心地よさがあるからです。

ウッドベースは暖かく太く響き、シンバルは高域の伸びが少し弱いですがリズムを刻むタイミングの良さ、ドラマーがシンバルを打ち付ける強さが手に取るように伝わります。

ピアノも透明感少し低く響きに濁りを感じますが、響きの音色はあくまでも美しく柔らかく、良質な金属と木材が混ざり合った独特の音質が良く出ます。

ボーカルは・・・！やはりレコードで聞くのが最高です。滑らかさ、艶やかさ、そして中央にコンパクトに定位する素晴らしい実在感、これらは針を使って記録された振動を直に読み取り、それを増幅する「アナログレコード」でしか得られない世界です。

レコードにあってデジタルにないもの。それは「響き」です。そして、その響きが生み出す雰囲気の良さを知ってしまうと、もうアナログから離れられなくなるでしょう。TD240-2 は、その芳醇なサウンドで聞く者を虜にする力を持っています。

このディスクは同じレーベルから CD としても発売されていて、私はそれを所有しています。最新の高級デジタル機器で CD を聴いた後にレコードで聞くと、やはり解像度感の低さが気になります。

しかし、数千円しかしないカートリッジを使っているのですから、それは当然でしょう。解像度を比較したいのであれば、少なくとも数万円以上のカートリッジを使うべきです。付属する数千円のカートリッジでは、精々数万円程度の CD プレーヤーの解像度が出れば良しとしましょう。

しかし、価格を遙かに超越した高級デジタル機器にもまったく劣らない「雰囲気の濃さ」には、驚かされます。レコードでこの曲を聴くと、人間が演奏している様子が音を通じて身体に伝わります。「魂のある音」と表現すればよいのでしょうか？この独特な「濃さ」はやはりレコードならではです。

分厚い中域と滑らかで響きの良い高域。軽く押し出し感のある低域。そのどれもがレコードならではの良さですが、TD240-2 は「CD みたいな音しかしない高額アナログプレーヤー」をその雰囲気の濃さで凌駕します。逸品館が見かけはちゃちな Thorens のレコードプレーヤーをお薦めしているのは、そのレコードならではの雰囲気の濃さが他メーカーのプレーヤーを圧倒しているからです。こういう「雰囲気の良い音」でレコードは、聴いて欲しいと思うのです。

イントロのトランペットの柔らかくふくよかな音。そして弦楽器の暖かく厚みのある音。それぞれが混じり合ったときの独特の濃さ。解像度こそ低いかも知れませんが、色彩感の濃さは圧倒的です。そして、その濃さから来る雰囲気の濃さ。それも、人間味のある濃さ。最近「有機的な音」という言葉をよく使いますが、レコードの濃さ、肉厚感はやはり別格です。

その雰囲気の良さばかりではなく、TD240-2 が嬉しいのは「セミオート機構」を持つことです。レコードをセットして、後はレバーを「Start」に倒すだけで演奏が始まり、レコードが終わるとターンテーブルが止まります。貴重なレコードと針を痛めずに、存分にレコードの良さを味わえる。毎日レコードをお聞きになるなら、音質が多少犠牲になってもオート機構は外せません。特に CD の便利さが染みついた身体でレコードを聴くには、オート機能はマストアイテムだと思います。

TD240-2 の濃さは音楽ファンを虜にするでしょう。

TD240-2　Goldring 1012GX

付属カートリッジの音を数万円の CD プレーヤーに例えるなら、1012GX の音は 10-20 万円くらいの CD プレーヤーの音質まで一気にアップします。

気になっていた解像度感の不足が完全に補われ、音の細やかさが飛躍的に向上しました。

ピアノやドラム、ウッドベースとボーカルの分離感もまるで違います。それぞれの音がクリアに分離します。レンジが上下に伸びると中域の独特の濃さが薄れますが、音質の改善がそれを補って余りあります。まったく不足を感じないクリアな音になりました。

ウッドベースの音質が一段と磨き上げられ、ピアノの響きがクリアで乾いた感じに変化します。数千円のお酒と数万円のお酒の「透明感の違い」と言えばおわかりいただけるでしょうか？雑味がなくスッキリとクリアな飲み口です。

立ち飲みやのざわざわした人間くさい雰囲気が、高級なバーのそれに変わりました。落ち着いたクラシックな真鍮とウッドの内装。バカラのグラスと口数の少ないバーテンダー。言葉を交わさなくても、芳醇な時間が流れてゆく。そんな大人の雰囲気で峰純子が歌ってくれました。

レコードを聴く、それを味わうのであれば、これ以上の音はいらないとさえ思えます。

試聴したレコード

アナログの全盛＆最終期に録音された、
ダイレクトカッティングの音の良い１枚。

21 世紀になってから発売された、
重量盤を使う高音質アナログレコード。

TD240-2　Goldring 1012GX

どぶろくが清酒になった。そういう雰囲気です。しかし、あの濁っていたどぶろくの味わいも、それはそれで懐かしく感じます。
楽器の数は倍以上に増え、それらの配置もきちんとしてきました。
付属カートリッジの音が、コンサートホール最後部の濁った音なら、今聞いている音は中央からやや前方です。若干間接音成分が不足して感じられますが、音の鮮度は抜群です。
解像度感、レンジ感は、高級デジタルプレーヤーの領域に達しました。同時にアナログらしい芳醇さは少し薄れて、本格的な交響曲らしい、緊張感が漂うようになりました。実にチェリビダッケらしい、精緻で静かな演奏です。
ちょっとクールすぎる印象もありますが、このレコードは「高音質ディスク」ですからこういう鮮烈な音の出方が相応しいのでしょう。
しばらく聞き続けていると、付属カートリッジとの違いに慣れたせいか、あるいはカートリッジが暖まったのか、出てくる音がさらに暖かく厚みを帯びてきました。
カートリッジの交換費用は、TD240-2 の本体価格の１／３に及びますが、その価値は十分あると思います。

試聴後感想

最近、各所で「アナログレーコードの良さが見直されている」という記事が目につきます。EAR を擁するヨシノトレーディングは、TSUTAYA とコラボして東京を中心に「アナログレコード演奏会」を開催するなどアナログ関係のニュースを発信しています。私は、それを知りながら「いまさらレコードねぇ」と醒めていました。
しかし、TD240-2 で久しぶりにレコードを聴いてみて、私の思いが「間違い」であったことを思い知らされます。オーディオラック最上段の CD プレーヤーを TD240-2 に置き換えるだけで、「オーディオルームの雰囲気」がまったく変わりました。
右端ラック最上段の TD240-2 を PC や CD プレーヤーの置き換えた様子を想像してください。音を出さなくても、TD240-2 が見えているだけで、何とも言えない安心感があります。まるで自室が高級バーに変わったような雰囲気。この雰囲気は、PC/ ネットワーク・プレーヤーでは絶対に味わえない世界です。
お酒を飲むグラスに凝る。そういう味わいの深さがアナログにはあります。
ただのガラスでしかない「バカラのグラス」がなぜ一個数万円もするのか、同じお酒を違うグラスで飲むとなぜあれほど味わい深さが変わるのか、レトルトやインスタント食品では味わえない「本物の良さ」を TD240-2 は私に思い出させてくれました。
同じアナログプレーヤーでも、最高音質を目指す Nottingham にはない「雰囲気の良さ」を Thorens は持っています。
「雰囲気」という目に見えない贅沢を味わえるだけでも、このプレーヤーを所有する価値はあると思います。
アナログはやっぱり凄い！
最近 TAD のイベンターが「逸品館のイベントで、音の良さよりも濃さを知った。最近は良さよりも濃さを優先してイベントの音作りをしている。濃さには好き嫌いがなく、イベントの評価が上がった」と話してくれましたが、言い得て妙だと思います。レコードは良さよりも濃さで聴くべきです。だから、刹那的な好音質をレコードに求めるのは止めましょう。
Thorens TD240-2 でアナログを始めてみませんか？数百万円のデジタル機器を超える、オーディオと音楽の未知の世界へ通じる扉が開くはずです。
今回はテストのためにレコードを聴きましたが、普段レコードを聴くことは皆無です。なぜならば、25 分ごとにレコードを裏返さなければなりませんし、放っておくとレコードとカートリッジを痛めるからです。仕事中、音楽を聞くのにそんな手間はかけられません。だから、もっぱらサーバーにリップした CD を聞いています。
音質的にはそれで十分満足なのですが、こうして久しぶりにレコードを聴くと、その良さは格別であると気づかされます。
今回テストした Thorense のプレーヤーでは、TD240-2 が断然お薦めです。Nottingham Interspace と比べて音質は及びませんが、レコードらしい雰囲気の濃さではそれを上回ります。Thorens のエントリーモデルは、昔ながらの作り方を継承し無理して音質やデザインを追求しなかったため、ビンテッジ製品らしい雰囲気が残っているからでしょう。
レコードを「らしい音」で聴きたい。しかし、CD のように手間はかけたくない。その夢を叶えてくれるのが、TD240-2 です。このプレーヤーは Thorens らしい芳醇なサウンドでレコードを文字通り「奏で」てくれます。そこから出てくる音は柔らかく厚みがあり、艶やかで滑らかです。誰が聞いても「この音は違う！」と感じるでしょう。今回のテストで借用した、TD240-2 は試聴機として発注しました。一号館に設置していますから、Thorens が持つビンテッジな世界をご堪能下さい。
新製品の TD2035/TP92 は TD240-2 に比べて割高に感じますが、価格差がその音質に反映されています。予算に余裕があり、レコードを聴くことを「特別なこと」と感じていらっしゃるのであれば、TD2035/TP92 を選択するのはよいチョイスだと思います。Nottingham ほど高解像度ではありませんが、音質と雰囲気の絶妙なバランス感覚が最高です。しかし、アームを TP92 以外のものにすると、そのバランスは崩れそうに思います。
最高峰モデルの TD550 は、価格差ほどの音質差を感じられませんでしたが、その原因のほとんどは ortofon のカートリッジと SME のアームにありそうです。この二つのメーカーは、設立当時から会社のオーナーや技術者が変わり、当初の音を留めているとは思えません。にもかかわらず、ブランド料として製品の価格がやけに高く、価格と性能が一致していない商品が多いように思います。アームは Thorens の純正品 TP125、カートリッジは MC タイプをお選びになられることをお薦めします。話は変わります。
最近、便利に恵まれる不幸を感じることが多々あります。毎日を生きる楽しさを見いだせないと言い換えても良いでしょう。
レコードで音楽を聞きましょう。忘れた何かを思い出せそうな気がします。そしてそれこそが、忘れてはならない大切なものなのです。